

## 主 題：本当の希望

聖書箇所：ペテロの手紙第一 1章3－5節

テーマ：どんな状況にあっても左右されることのない「本当の希望」とは何か？

救い主イエス・キリストが十字架に架かり三日目に復活されたことを覚え感謝する今日のこのイースター、今朝皆さんとともにみことばから考えたいこと、それは「希望」についてです。今日のテキスト I ペテロ 1：3－5 を読みます。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。：4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。：5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。」、これから内容を見ていきますが、その前にこのペテロの手紙がどのような歴史的背景の中で記されたのか？そのことを思い返してみてください。1：1には「イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、…」とあります。「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤ」と現在のトルコに当たる地域に散って暮らしているクリスチャンたちに向けて、ペテロはこの手紙を書きました。彼らは主を愛しみことばに熱心に従おうとする者たちでした。しかし、どの時代にあっても、主の前を正しく歩もうとする者には難しさがあるように、彼らもその信仰ゆえに様々な苦しみを味わっていたのです。

この手紙を見ても繰り返して苦しみを味わっていた彼らの姿を見ることが出来ます。1：6には「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが」、2：19「人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。」、4：4「彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。」、こうしてみことばから分かるように、彼らは様々な試練を経験していました。悪口を言われたり、理不尽で不当な受けることがありました。主の前を正しく生きようとすればするほど周りの人たちに非難され、彼らは酷いやがらせを受けていました。肉体的にも精神的にも彼らは大きな痛みを負っていたことでしょう。

また、彼らを苦しめていたのはこれだけではありませんでした。皆さんも覚えておられるでしょう。紀元64年に当時ローマの皇帝として君臨していた暴君ネロが、都市を再生するためにローマの町に火を放ったのです。火は瞬く間に町中に広がり町のほぼ半分を焼き尽くしてしまいました。多くのいのちが失われました。人々は火事を起こした人物がネロに間違いないと確信していました。しかし、その噂を聞きつけたネロは、自分に向けられた怒りの矛先を逸らそうとその罪をクリスチャンたちに擦り付けたのです。こうしてクリスチャンたちは暴君ネロによって大規模な迫害を受けるようになったのです。

ある者は生きたまま火あぶりに、ある者は見世物として観衆の前で野獣に八つ裂きにされ、また、ある者は十字架に付けられて殺されていきました。彼らは自分の住んでいたところを追われて様々なところへと逃げていかざるを得なかったのです。想像してください。キリストを信じる信仰ゆえに迫害を受け、いのちを狙われているのです。いつどこで捕まってもおかしくない、捕まれば酷い拷問が待っていたのです。また、その迫害の手を逃れた先でも、人々の目の敵にされ、酷い扱いを受けたのです。自分の将来がどうなるのかも分からず、自分を憎む者の中で押しつぶされそうになりながら、いつ終わるかも分からない苦しみの中を生きていくしかなかったのです。

もし、私たちがそのような状況に置かれたなら、その中でどのように振舞うのでしょうか？私たちがみな日々の生活にあって様々な苦しみを体験します。その当時のクリスチャンたちのようにいのちを狙われるというような迫害はないとしても、信仰ゆえに数々の戦いを体験することがあります。また、自分の抱えている問題が非常に大きく深刻であるゆえに心が締め付けられ辛くなってしまったり、また、助

けを求めようにも自分の周りには一切助けがないような、そんな孤独な状況に追い込まれてしまうことがあるかもしれません。

そのような状況に陥ったとして、私たちはその中でどのように振舞うでしょうか？最も自然な応答は喜びを失って悲しみふさぎ込んでしまうことかもしれません。「どうしてこんな苦しみを味わわなければいけないのだろう…」「いったいこの苦しみはいつまで続くのだろう？」「今の私には希望など持つことなどできない」と。しかし、皆さんに今日覚えておいてほしいことは、この手紙を記したペテロはそのようには教えていなかったということです。愛する兄弟たちが酷い困難の中にいたことを分かっていたペテロは、彼らにこのように言って励ましを与えました。1：3「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。そして、驚くべきことが続きの6節に「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。」と書かれています。

彼らは大いに喜んでいたのです。苦しみが去ったからではありません。これまで見て来たように、彼らは深い悲しみの中に、試練の真ただ中であつたのです。しかし、そんな中で彼らは喜ぶことができたのです。イエス・キリストの復活を通して本当の希望を持っていた彼らは、どんな状況にあっても変わらずいつも喜ぶことができたのです。では、皆さん、ペテロがここで触れた「生ける希望、生ける望み」とはどのようなものだったのでしょうか？どうしてこの希望は苦しみの中にある彼らの心に溢れんばかりの喜びをもたらすことができたのでしょうか？今日はその答えをみことばから見ていきましょう。私たちが今日見る3－5節に「本当の希望」について四つの側面を見るのが出来ます。聖書が教えている本当の希望とは何か？そのことをイエス・キリストが復活されたことを記念するこの日に、ともに考えたいと思います。そして、皆さんひとり一人今一度考えてみてください。自分は今この希望をもって生きているだろうか？と。このみことばが皆さんの励ましとなることを心から祈っています。

## ☆本当の希望 : 四つの側面

### 1. 希望の源 : 神のあわれみ 3 a 節

3節の初めに「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、…」とあります。本当の希望がどこから来るのか？その源は「神のあわれみ」だとペテロは教えています。「私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてください」したのはただ「主のあわれみ」だったのです。この「あわれみ」ということばは「深刻な必要、助けを覚えている者に対して優しさや思いやり、関心を払う」という意味を持っています。

要するに、私たちに与えられている希望とは私たちが努力をして手に入れたのでも、そもそも私たちがそれに値したのでもなく、深刻な問題を抱えている私たちの様子をご覧になった主が、その大きなあわれみのゆえに与えてくださったものだということです。そして、私たちが聖書を見るなら確かに、主を知る前の私たちはみな例外なく、主のあわれみを必要とする罪人であるということを見て取ることが出来ます。私たちがみな主のあわれみを必要とする存在だったのです。

私たちがよく知っているエペソ2：1－3にこのように書かれています。「1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であつて、2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」、私たちがみな「自分の罪過と罪との中に死んでいた」、自分の願うまま心の望むままに肉の欲の中を生き、私たちが造ってくださった創造主に従うことよりも、神の前に忌み嫌われることを好き勝手に行つて来たのです。だれ一人として主を求めようとする者はなく、だれ一人としてこの主について考えたい知りたいと思う者はいませんでした。だからこそ、そんな私たちは「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」だったのです。

ある人はこのように思うかもしれません。「私は周りの人に比べてずっといい人だ。人の称賛を得るようなすばらしいこと、人が喜んでくれることを私は頻繁にしている。だから、私は神のさばきには遭わないだろう。大丈夫だ！」と。しかし、聖書が教えていることは明白です。どれ程人の目にすばらしいと思えることをしていても、心の中をすべてご覧になる聖く正しい神の前には、だれ一人として正しい

者として認められる者はいない、だれ一人としてこの地上に義人はいないのです。私たちがどれだけ努力をして良い行いをしたとしても、主の完全な義の基準を満たすことは絶対にできないのです。こうして私たちは自分たちの持つ罪ゆえに、主にさばかれ永遠のさばきを地獄で受けることのみ値する者だったのです。だれ一人として、自分の力で状況を改善することもできず、私たちのうちには希望など一切ありませんでした。私たちにはあわれみが必要なのです。こんな私たちに主が為してくださったことは驚くべきことでした。主ご自身が私たちにあわれみを示し罪からの救いを与えてくださったのです。

もう一度3節を見てください。このように書かれています。「神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、…私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。皆さん思い出してください。この「新しく生まれる」ということに関してイエスは大切なことを教えていました。あのユダヤ人指導者ニコデモがイエスの許にやって来たときに、イエスは彼にこのように答えます。ヨハネ3：3「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と。イエスがここで言わんとしたことは明白でした。人はだれでも新しく生まれ変わらなければ罪の赦しを得ることも永遠のいのちをもって天に行くことも絶対にできないと、そのように教えたのです。

私たちは自分の力で自分を救える者などいません。自分の力で自分を変えることもできませんでした。しかし、こんな愚かで弱く何の価値もない私たちに主が新しく造り変えてくださった、罪の中に死んでいた私たちに神ご自身が新しいいのちを与えてくださったのです。私たちが主の前に何か喜ばれることをしたからではありません。ただあわれみ深い主が、人には絶対にできないことを成し遂げてくださったのです。主の示してくださったこのあわれみ深さ、新生のみわざについて別の聖書箇所でもこのように教えています。テトス3：5に「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」と書かれています。また、Ⅱコリント5：17にも「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とあります。これが私たちに与えられた希望です。

だれ一人として主のあわれみや慰めを求める資格などありませんでした。私たちは自分の愚かさ罪深さのゆえに御怒りを受けさばかれて当然の存在だったのです。しかし、そんな私たちに主はあわれんでくださった、何よりも救いを必要としていた私たちに主はあわれんでくださったのです。私たちのために神の御子イエス・キリストがこの地上に来てくださって、私たちの罪を負って十字架に架かってくださった。そして、イエスが流されたその血潮をもって罪の代価を支払ってこんな私たちに神のものとしてくださった。あわれみ豊かな神がその大きな愛をもって救いのみわざを成し遂げてくださったのです。皆さん、神のあわれみ、これが私たちの希望の源です。

## 2. 希望の根拠 : イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって 3b節

3節の続きに「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、」と書かれています。本当の希望のその根拠をどこに置いていたのか？それはイエス・キリストの復活にあるとペテロは教えています。イエス・キリストはただ十字架に架かって死なれたのではなかった。預言されていた通りに、三日目に墓の中からよみがえられたことによって、ご自分が神であること、罪と死に勝る偉大な力をもった存在であることを復活を通して明らかにされました。そして、この主の復活のうちにこそクリスチャンのもつ希望の土台があるのです。そのことをパウロも同じようにこう述べています。Ⅰコリント15：12-20「:12 ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。:13 もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。:14 そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。:15 それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。:16 もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお、自分の罪の中にいるのです。:18 そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。:19 もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。」、パウロは言います。

もし、キリストの復活がなかったなら、今もなお私たちは罪の中にいてたださばきを待っている、そんな身なのだ。もし、キリストの復活がなかったとするなら、すでにキリストを信じて死んでいった者たちはみな滅んでしまったと。キリストの復活がなかったなら、私たちクリスチャンは偽りのもののために人生のすべてをささげるそんな愚かで見じめな、すべての人の中で最も哀れな者だと言います。

もし、今もイエス・キリストのからだは墓の中に収められていたとするなら、私たちには何の希望もありませんでした。イエス・キリストが復活されなかったなら、私たちの持っている約束も希望も何もかも無価値なものになっていたのです。しかし、主はよみがえられたと、20節「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」と。だからこそ、私たちが空っぽの墓を覚えるときに、私たちは確信をもってこのように言うことができるのです。「主は確かによみがえられた！」と。希望のなかった私たちに主が十字架に架かり復活されたことによって、今完全な罪の赦しを与えられた。今、私はこの主が成し遂げてくださった救いのみわざを喜びながら生きていくことが出来る。イエス・キリストが復活されたから、たとえ今、どのような苦しみの中に置かれたとしても大丈夫だ。死から復活された主イエス・キリストが、すべてを支配されている神が私とともにいてくださる。「ああ、何と喜ばしく感謝なことだろう」。

牧師であり神学者であったエドモンド・クラウニーは主の復活のすばらしさをこのように表現しています。「私たちの希望は過去に根差している。イエスは甦られた！私たちの希望は今も変わることはない。イエスは生きておられる！私たちの希望は将来成し遂げられる。イエスが帰って来られるのだ！」と。イエスの復活、これこそが私たちが持つ希望の源です。イエスの復活があるからこそ、過去、今、未来のすべてにおいて私たちの信仰を支える土台がここにあるのです。

さて、こうして私たちは神のあわれみ、主の復活のすばらしさを見ました。そのすばらしさを知っているのです。それなら、この主にどのように応答するべきでしょうか？ここまで聞いて来て、私はまだこの主を個人的に知らない、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れていない、この希望を知らないと言われる方がおられるなら、どうか、主の前に自分の罪を悔い改めて主に赦しを求めてください。あわれみ深い神は、あなたを新しく造り変えて主にある救いの喜びに与る者として、そのように変えることの出来るお方です。どうか、先延ばしにすることなく、あなたのために流された血潮を覚えて主の復活を信じて、今日からこの主のためだけに生きていく、そんな歩みを始めてください。

主を愛し、主のために生きようとされている皆さん、私たちは確かに日々の生活の中であって様々な難しさ、様々な試練に直面することでしょう。酷い苦しみによって希望を失ってしまう状況に陥ってしまうこともあるでしょう。でも、覚えることです。主はあなたを愛して十字架に架かってくださいました。約束通りにその死から復活してくださいました。こんな愛を示してくださった方が、こんな偉大な力を持った方が今あなたとともに歩んでくださっているのです。そのことを知っているなら、そのことを覚えるだけでなくこの主に感謝をささげることです。ペテロはこう言っています。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。」と。ペテロは何よりもこの主に賛美をささげたのです。「主はすばらしい！」と。私たちが主のすばらしさを知っています。私たちが同じように主のあわれみを、主の復活のすばらしさを知っています。それなら、私たちが心からの賛美をこの主にささげていくべきです。

私たちはどんなときにも希望をもって生きていくことができます。なぜなら、それは私たちの主イエス・キリストが復活されたからです。これが私たちの持っている希望の根拠になります。

### 3. 希望の本質 : 生ける望み 3b節

本当の希望についての三つ目の側面、希望の本質について3節の最後にこのように書かれています。「生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。本当の希望とはどのようなものか？ペテロはここで「生きている望み」だと言います。聖書が教えている本当の希望は確実に、この世が考えているような「こうなればいいなあ、この願いが叶えばうれしい！」というような将来に対する淡い期待を表しているのではないということです。もし、ペテロが手紙を宛てた苦しみに遭っていた兄弟たちがこのような希望に縋っているとすると、彼らは酷い困難の中であって苦しみの中であって喜ぶことなどできなかったはずです。

新しくされた者が持っている「生ける希望」は実際にどうなるかは分からないというそんな不確かで力のない死んだ希望ではありません。残念ながら、救いを知る以前の私たちは本当の希望を見出すことが出来ずに、暗やみの中をさまよっていました。エペソ2：12に「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」、神を知らずにキリストから離れて自分勝手に生きていた私たちには、本当の「生ける望み」を知る由もありませんでした。だからこそ、この世にある様々なものに期待を置いてトライしてみたものの、その都度、いろんなことで失意を味わったりしたのです。ある時は物事がうまくいっているとそのことを喜んで、次の瞬間には困難が降り懸って来て慌てふためいて驚いて恐れて不安になったり、そのように物事を進めていきたいと願ってもうまく行かずに悲しみを抱いたり、大いに期待して楽しみにしていたことが裏切られて心が乱されて、怒りさえもってしまったり、この世の空っぽで力のない死んだ希望には、どんな状況にあって人も喜びを与えるような力は備わっていないのです。

この世にはそんな希望しかないのです。しかし、聖書が教えることは、神のあわれみによって、イエス・キリストの復活によって与えられた主にある生ける希望は、人に大きな励ましを与えることができるのです。必ず、主は約束を成し遂げられるというその確信、主の変わらない誠実さに根差した本当の生ける希望は、その人の心に喜びをもたらすことができるのです。皆さん、私たちがいつも喜んでいられるのは、私たちのうちに何か力があるからではありません。なぜ、私たちは喜ぶことができるのか？それは、あの十字架も復活も、それらは偶然起こったものではなく、すべて、主が約束されていたことが成し遂げられたこと、その主の変わらない誠実さを覚えるときに私たちはこの主に期待を置くことができるのです。主は今までも約束を守って来られた、だから、これからも約束を守られる。主にあって喜ぶことができる。そのことばは真実だと。

様々な約束がありますが、その一つがヨハネの手紙第一に記されています。3：2、3「2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。3 キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」、こんな約束を与えてくださっている主が、決して嘘をつかない誠実なお方、生きた真実な神であるからこそ、私たちは自分自身にこのように言い聞かせることができるのです。こんな希望をもって生きていくことができるのです。「この主は今までも、そして、これからも必ず言われたことを成し遂げられる」と。

主はこんな約束を与えてくださった。私はこの約束に信頼して生きていこう。確かに、今置かれている状況は難しく辛くて苦しいけれど、地上で起こっていることが私にとってすべてではない。私はいつか必ず主にお会いする。その日が必ずやって来る。だから、今を喜んで主のために生きていこう。主が必ず言われたことを成し遂げられるお方だからこそ、この主のうちに希望を見出すことができるのです。主にある生ける希望、生きている望み、これこそが私たちの希望の持つ本質です。生ける誠実な神のうちにこそ、私たちがどんなときにも喜ぶことができる本当の生ける希望があるのです。

#### 4. 希望の約束 : 「天にたくわえられた資産」と「力ある神の守り」 4、5節

1) 天にたくわえられた資産 : 4節「また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」、ペテロは新しくされ神の子どもとされた者には、それにふさわしいすばらしい祝福が備えられていると言いました。では、いったいそれはどのようなものでしょう？ここに資産に関して三つのことばが用いられていました。「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」と。

a) 朽ちることもない = 「腐敗したり消滅することが決してない」ということです。主から与えられる祝福はいつまでもどんなことがあっても決してなくなることはないのです。

b) 汚れることもない = 汚れやしみのない聖いもの、いっさい罪に汚れていない純粋なものであることを意味しています。主が用意してくださっている祝福はいっさいの汚れがないのです。私たちは、この世の私たちの周りにあるもの、また、私たち自身も罪に汚染されているということを知っています。悲しいことに、私たちの心も罪によって汚れてしまっているゆえに、主を喜ばせたいと願ってもときに

私たちは主を悲しませるような言動を取ってしまうことがあります。

私たちの周りはそのように汚れたもので溢れています。しかし、主から与えられ天にたくわえられている資産にはいっさいの汚れはないのです。今の私たちには想像できないようなすばらしい祝福が待っていると、そのことを教えているのです。

c) 消えて行くこともない = いつまでもそのすばらしさが色褪せることはないということです。花は時間とともにしぼんでいきます。しかし、主が与えてくださる祝福はいつまでも変わることがなく、どんなときも魅力的なものだ、いつまでもすばらしいものだということです。

このように消えることのない純粋でいつも変わらない主の資産が、天で私たちのためにすでに用意されているのです。そして、この祝福が天にたくわえられているからこそ、だれもそれを奪い去ることも、また、傷や汚れが付いてだめになってしまうこともないのです。皆さんもイエスが「天に宝をたくわえるように」と言われたことを憶えておられるでしょう。マタイ 6 : 19、20 「:19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。:20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」

私たちの資産は天にたくわえられそこで私たちを待っているのです。消えてなくなってしまうことも、私たちが天に行ったときにその祝福が汚れてしまっていることもいっさいないのです。私たちはいつの日か必ず、この主が用意してくださっているすばらしい祝福に与る日がやって来ます。こんな約束が私たちには与えられているのです。この世が決して与えることの出来ない溢れんばかりの喜びが私たちを待っているのです。それなら、私たちはこの日々の歩みをどのように、日々の生活の中でどこに心を向けて歩んでいるのでしょうか？ 私たちにはもうすばらしい祝福が用意されているのです。この地上で何があったとしても、主イエスを愛して従う者には主が祝福を用意してくださっているのです。

そんな希望をもっている私たちはこの地上のはかない喜びや楽しみに目を向けて、心を探らわれて生きていくのでしょうか？ それとも、天にあるすばらしい永遠に価値のあるものに目を向けて日々の生活を主のために生きていこうとするのでしょうか？ また、こんなすばらしい祝福を知っている私たちは、このすばらしい祝福を、それをもたらした救いの福音を周りの者に証しているのでしょうか？ 私たちはこんなにもすばらしいものを与えられたことを知っています。私たちだけに留めて置くべきではないですね。私たちの責任は、私たちのためにご自分のいのちを犠牲にしてくださった主を覚え、この方を愛し、この方の栄光を現すために、地上に置かれている間、主が召してくださるその日のそのときまで、この主のために生きていくことです。

さて、天にたくえられた資産、これが私たちを待っている四つ目のすばらしい希望の約束でした。でも、これを聞いた人はこんなことを思ったかもしれません。また、当時の人も恐らく思ったでしょう。すばらしい、こんな祝福が私たちを待っている、でも、今は？ 将来のこともだけど今のこの苦しみの中ではどうすればいいのだろう？ 今私は苦しんでいるのだ…と。もし、この苦しみゆえに最後まで信仰を守り通すことができなかつたらどうなるのだろう？と。

ですから、最後にペテロは5節でこのように述べるのです。

2) 力ある神の守り : 5節「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。」、本当の希望がもたらす約束の二つ目は「力ある神の守り」でした。「守られており」ということばは「兵士が敵から大切な拠点を守る、重要な地点を見守る」という意味を持っています。つまり、ここでペテロが苦しみに遭っている兄弟たちに言ったことは「兄弟たち、心配しなくてもいい、どんなところにあってもどんなことを経験していても、あなたがたは大切な者として神の御力によって守られている。力ある主権者である神があなたがたがどこに行っても最後まであなたがたとともにいて見守っていてくださる。だから、もう安全なのだ。」と。

皆さん、迫害に遭っていたクリスチャンたちが、苦しみの中に居た兄弟たちがなぜ喜ぶことが出来たのか？ 想像できますね。彼らの置かれていた状況は確かに深刻なものでした。しかし、彼らはそれらに心を探られることなく、その中であって自分に守りを与えてくださる主を見上げて生きていたのです。彼らが試練の中で喜びを持てたのはただ主の守りの約束を覚え、そして、この神に信頼したからでした。

私たちにはどうすることもできなくても主が守っていてくださる。そして、皆さん、感謝なことに、

今日の私たちにも同じ約束が与えられているのです。私たちも様々な痛みや悲しみを味わうことがあります。苦しみや不安で心がざわついたり孤独を覚えることがあるでしょう。そんなときは自分の弱さを認め主への信仰を持って主の助けを慕い求め続けることです。私たちは決して自分の意志の力をもって試練に勝利することはできません。しかし、私たちを愛してくださっているあわれみ深い主が、その主にすべてを委ねるのであれば、主が私たちを大切なものとして扱い守ってくださるのです。すべてのことを通して、最善を為してくださる神が道を外れそうになっている私たちを正しい道へと連れ戻し、弱っているときには立って歩み続けるための力さえも与えてくださる、この主の愛が私たちを守ってくださるのです。

そして、感謝なことは、この主の愛から私たちを引き離すことのできるものは何一つないのです。ローマ8：38、39に「:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」とある通りです。こうして、私たちのうちに良い働きを始めてくださった方は最後までともにいてその働きを終わらせてくださるのです。私たちの終わりの日に用意されている救い、キリストと同じ栄光のからだを受けることが出来るのです。主が守ってくださるからです。これが私たちに与えられている希望の約束、どんな状況にあっても喜ぶことを可能にしたキリストの復活にある生きる本当の希望でした。

さて、今朝は皆さんとともに「本当の希望」について考えて来ました。最初にした質問は「今、あなたは本当の希望をもって生きているでしょうか？」でした。神のあわれみによって、イエス・キリストの復活を通して与えられた生ける本当の希望、あなたはこの希望の約束を楽しみながら今を生きているでしょうか？もし、その希望をまだ知らないと言われる方がおられるなら、帰る前に、横にいる方でも教会のリーダーでもいいですから話をし、このすばらしい主にある本当の希望を知って帰ってください。そして、この主の希望を今持っていると言われる皆さん、いつもイエス・キリストの復活を覚えることです。ここに私たちの希望の根拠があります。この主の喜びに与りながら、すばらしい喜びを、本当の希望を与えてくださった主のために日々を歩んでいきましょう。